公衆電話ボックスのうつりかわり

1900（明治33）年
初めて京橋際に建てられた、公衆電話ボックス第1号。六角錐形、白塗りのモダンな建物で「自働電話」と呼ばれた。

明治末期
明治末期の赤塗りの六角形ボックス。全国で200カ所に建てられ、庶民の電話として活躍した。

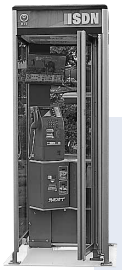
1954（昭和29）年
初の鋼製ボックスがお目見え。クリーム色のボディと赤い屋根から“丹頂形”と呼ばれた。戦後色を一掃、街角を彩った。

1964（昭和39）年
東京オリンピック大会会場付近で試用し、1969（昭和44）年から全国的に使用された組み立て式ボックス。組み立て、解体が簡単で、四方とも透明なガラスであり、盗難・いたずらなどの防止に役立っている。

1927（昭和2）年
四角形でグレーの昭和初期のボックス。窓も線も細く、しゃれたスタイルで親しまれた。

1945（昭和20）年
被災地に建てられた組み立てバラック式ボックス。ガラスの節約で窓は小さく太い格子が入り、暗い感じであった。

1985（昭和60）年
街の景観になじみやすく、ガラス以外の部分は、ライトブラウン、ダークブラウン、グレーのカラーバリエーションに。旧形ボックスよりも広く、耐震、防暑、遮音、防雨、照明などに気を配り、使いやすさをさらに追求している。



1991（平成3）年
ディジタル公衆電話に接続する携帯端末操作用大型テーブルを標準装備し、電話帳ホルダー、腰掛けなどの内装設備も充実させることにより、街のサテライトオフィス化を実現。さらに通気口の拡大や照明のアップなど快適性をも備えている。